

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻
英語教授学領域
宝来 華代子

【論文題目】 Confirmatory Factor Analyses of Hypothesized Measurement Models for Three Learner Autonomy Instruments Intended for the Japanese College Population
(日本人大学生を対象とした3つの学習者オートノミー用具のための仮説測定モデルの確証的因子分析)

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、内外で開発された外国語学習における学習者オートノミー (learner autonomy) を測定する用具 (instrument) が仮定する測定モデルに関して、「現実により得る可能性」 (plausibility) があるのか否かを明らかにすることを目的としている。そのために、海外で開発された2つの用具および日本で開発された1つの用具（3つとも5あるは6段階リッカート尺度アンケート）を研究対象として、それぞれについて厳密な実証的研究を行っている。取り上げた測定用具は、CLAQ (Chang's Learner Autonomy Questionnaire: Chang, 2007), ALS (Autonomous Learning Scale: Macaskill & Taylor, 2010), LAQ (EFL Learner Autonomy Questionnaire: Apple, 2011; Shimo, 2008, 2009) である。本研究では、学習者オートノミーを学習者が自らの学習について自発的に学習の方向性を決めて取り組んでいけることとし、これを持つ学習者は学習が成功する可能性がより高いと仮定できるとしている。

「文献研究」の章では、オートノミー一般および関連領域の研究を俯瞰した後に、本研究で取り上げた測定用具、各用具が仮定するモデル、またそれぞれに対する研究データに検討を加えている。その上で、日本の英語教育におけるオートノミー測定用具として、これらの3つの用具が仮定する測定モデルの確からしさを検証する必要性を指摘し、研究の意義を明確にしている。

「リサーチ・クエスチョン」の章では、用具が仮定するモデル (CLAQ は3つ (改訂版を含む), LAQ は4つ (同左), ALS は1つ) を述べている。モデルは、例えば CLAQ の Model 1A は autonomy beliefs に関する10項目, Model 1B は autonomy behaviors に関する10項目から成る。モデルの確からしさの程度を収集するデータに対する確証的因子分析 (CFA: Confirmatory Factor Analysis) から解析するとしている。

「方法」の章では、採用した統計解析 (正規性や信頼性の検定, 確証的因子分析) と本論文における考え方が述べられている。CLAQ と ALS については、日本語版を開発する必要があり、その手順 (日本語版と原著版の一致度を高める手続き) が報告され、慎重な修正を経て妥当性の高い測定用具となっている。なお、各実証研究への参加者 (大学生) 数は、CLAQ が373名, LAQ が388名, ALS が1068名であった。

「結果」の章では、歪度と尖度の比率に基づく正規性の検定, クロンバックの α 値による信頼性の確認, また TLI (Tucker-Lewis Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation), SRMSR (Standardized Root Mean Squared Residual) の4つの指標にそれぞれ定めた閾値と照合して、確証的因子分析結果のモデル適合度の解析が行われている。解析の結果, CLAQ,

LAQ, ALS のいずれについても、本研究で設けた基準を満たしているオートノミー測定用具はないことが判明した（ただし、LAQ の Model 3B は基準に最も近い）。極めて厳密な結果解析が行われていると言える。

「考察」の章では、「結果」を踏まえて各用具に検討が加えられている。LAQ は日本の英語教育の中で用いることは慎重であるべきとし、CLAQ と ALS については原著者の研究の文脈で再検討されるべきであると指摘している。また、「結論」の章では、研究のまとめと限界、今後の方向性が述べられている。

取り上げた3つの測定用具すべてについて、日本の英語教育における適合度は十分でないことを厳密な検証方法から明らかにしており、安易な研究や教育への応用を戒めた意義は大きく、今後の研究の発展の可能性も少なくない。本論文は博士（文学）の学位を授与するための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成26年1月21日（火）に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。まず、本人から研究の学問的意義・位置付け、方法、主な成果および研究の示唆することや今後の方向性の概要が英語で発表された。引き続き、口頭試問が行われた。本人は、審査委員から出された質問に的確に答えることができ、本人が博士論文で対象とした研究分野や関連領域、また研究手法や得られた結果について十分な専門的知識と理解を持つことが確認された。申請された学位論文が博士の学位の授与に値する水準にあると、審査委員全員の意見が一致した。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 アイズマンガー イアン
委員 山下 徹
委員 ラスカウスキー テリー
委員 折田 充
委員 サガズ ミシェル